

精神科病棟における自殺未遂者への看護(第46回保健学科学術研究会)

著者	光永 憲香, 齋藤 秀光
雑誌名	東北大学医学部保健学科紀要
巻	16
号	2
ページ	128
発行年	2007-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/40485

演題 (3): 「精神科病棟における自殺未遂者への看護」

講師: 光永憲香 (看護学専攻, 地域保健看護学講座, 精神看護学分野助教)

座長: 齋藤秀光 (看護学専攻, 地域保健看護学講座, 精神看護学分野教授)

現在, 自殺者は, 1998 年以降, 毎年 3 万人を超えている。この数は, 交通事故死の 3 倍にもなる。ここ最近の研究では, 自殺者の 9 割が自殺前に何らかの精神疾患に罹患していることが分かっている¹⁾。また, 自殺未遂者は自殺既遂者の 10 倍以上にわたり, 自殺未遂者が自殺を既遂する割合は, 自傷後 1 年以内に 0.5%~2% で, 9 年後には 5% であると報告されている²⁾。つまり, 自殺未遂者の自殺のリスクは, 一般人口の数百倍であり, 自殺未遂者への再企図防止につながる援助が急務となっている³⁾。

著者は, 精神科病棟に 3 年間勤務し, 多くの自殺未遂者や自殺既遂者と関わる機会を得た。その中で, 重度の自殺未遂をおこした患者が退院し, 社会復帰した経験を持った。そこでの援助の実際を振り返ることで, 今後の自殺未遂者への看護援助に活かすことが出来ないだろうかと考え, 質的研究を行った。

対象は, A 氏で, 20 代半ばで境界性人格障害の女性である。20 代初めから, 家族や周囲との人間関係悪化により, 自殺企図を繰り返していた。今回の入院は, 母親との関係で, 見捨てられたと思いい自殺を図った。著者は受け持ち看護師であった。

研究方法は, A 氏への看護実践を記録していたフィールドノートと看護記録を元に, 看護師と患者との関係において意味あると思われる 15 場面を取り出し, プロセスレコードに再構成した。そこから, 患者-看護師関係における変化の分岐点と感じられた 4 場面を取り出し, 看護師の働きかけの特徴, 患者-看護師関係の意味を取り出した。看護師の働きかけの特徴は, ① 患者が死にたいとまで思いつめた経過を察し, 「生きる」ことを前向きに考えていけるように患者と一緒に考えた。② 看護師自身が患者について「自ら命を捨てよう

とした人」と感じていたことに気付き, 自己を内省しながら援助を行った。③ 身体的なケアを媒介に患者が自立して生活できるような働きかけを続けたことがあった。その看護師の働きかけを, Peplau の人間関係の発展過程に重ねると, 患者-看護師間の信頼関係をもとに, A 氏が看護師を活用しながら, 家族との関係調整ができていたことから, 「開拓利用の段階」まで A 氏と看護師関係が発展していたと考えられた。

今後は, 精神科における自殺既遂者・自殺未遂者の軽減に向け, 早期的な症状アセスメントに向けての研究を行いたい。

文 献

- 1) 張 賢徳: 中年の自殺の病理, 医学のあゆみ, **194**, 505-508, 2000
- 2) Owens, D., Horrocks, J., House, A., Fatal and non-fatal repetition of self-harm: Systematic review, Br. J. Psychiatry, **181**, 193-199, 2002
- 3) 樋口輝彦: うつによる自殺未遂者の再発予防に関する研究, 厚生労働科学特別研究事業分担研究報告書, 2006